

# 「名詞ある」について

## —「名詞がある」「名詞のある」との比較—

大 塚 望

### 要 旨

本稿では、名詞を修飾する「名詞ある」を中心に、その文法的特徴を探った。その結果、見かけ上は「名詞＋動詞」でありながら一語として、連体詞あるいは形容詞と類似した機能を示すことがわかった（表1）。さらに、「名詞がある」「名詞のある」との違いについて考察し、「名詞ある」が最も形容詞性が強いこと（表2）、文体的に「見出し」に適した特徴を持つことがわかった。最後に、「ある」の前接する名詞の種類と「 $\phi$ ／が／の」のパターンを確認し、「名詞ある」の「名詞」が抽象的な名詞であり、また「が」「の」の単なる省略を超えた、日本語全体において存在感のある表現であることがわかった。

キーワード：名詞ある 連体詞 第三形容詞 連体修飾節主語

### 1. はじめに

これまで筆者は機能的な動詞に注目し「ある」と「する」を研究してきた。「する」は名詞と結合することで「勉強をする」という格助詞「を」を介した連語を作り、さらに「を」を脱落させることで「勉強する」という完全に一語となった動詞を出現させるに至った。一方、「ある」は「人気がある」のように名詞と結合して連語を形成することは確かめられたが、「が」を脱落させ、「人気ある」という完全に一語の動詞を出現させるには至っていない。しかし、「勇氣ある行動」のように「が」が脱落した形で名詞を修飾し、その名詞にある特徴を付与するという形容詞的な用いられ方をすることが指摘されている。本稿では、この「名詞ある」という表現を取り上げ考察する。

「名詞ある」の先行研究については、管見のところ彭（2002）しか見られず、村木（2002）が第三形容詞という分類の中でこの存在を指摘しているのみである。

本稿では、まず「名詞ある」の文法的な特徴を分析し、そして、「が」「の」が残っている「名詞がある」「名詞のある」との相違を明らかにしていく。以下、用例は基本的に辞書、小説、新聞のものを用い、参考にインターネットでも検索を行った。ただし、インターネットの例はかなり特殊な例もあり、内省により自然だと判定したものを採用する。

## 2. 「名詞ある」の文法的特徴

「名詞ある」は、名詞に「ある」が助詞の介入なしに直接付加されている表現である。名詞が動詞と共に用いられる際には格助詞の存在が不可欠にも関わらず、当該の表現にはそれがない。このような特殊な語の結合が文法的にどのような特徴を示すのか、本章で様々な角度から考察を行う。

### 2.1. テンス対立の無いこと

動詞は、基本的に時間軸に沿って展開される動作であるために、テンスやアスペクトを持つ。例えば、(1)のように名詞修飾節においてもテンスやアスペクトの分化を示す。しかし、動作ではなく存在を表す「ある」は(2)のように、動作の過程がないために通常テンスはあってもアスペクトはない。

(1) 仕事で {使う／使った／使っている} 道具をきれいにする。

(2) 机の上に {ある／あった／\*あっている} 本をもらった。

ところが、「名詞ある」は(3)(4)のように、テンスの分化も見られないのである。

(3) 魅力 {ある／\*あった／\*あっている} 人物に出会う。

(4) 勇気 {ある／\*あった／\*あっている} 青年を求めている。

つまり、「名詞ある」は、彭(2002)でも指摘されるように、時間に関する文法的機能を担わず動詞という特徴を削ぎ落としてしまっていると言えよう<sup>1)</sup>。また、テンスを表すことがない点において、通常の述語用法を持つ動詞、形容詞、名詞述語(名詞+だ)とも異なることがわかる。

### 2.2. 結合度が強いこと

「名詞ある」は「名詞」+「ある」という二語なのか、あるいは「名詞ある」で一語なのだろうか。ここでは、「名詞」と「ある」との結びつきの強さを測るために、両者の間に別の要素を挿入してみる。挿入できればそれぞれが独立した単位として存在し、二語であると考えることができる。また、挿入できなければ

両者は連語として強い結合を示し、一語であると考えることができよう。

まず、「ある」の用法でも具体物の存在を表し、その主体が「が」「の」でマークされる名詞修飾節について確認する。→は語の挿入という操作を示す。

(5) 3台テレビ {が／の} ある部屋 →テレビ {が／の} 3台ある部屋  
このように名詞と動詞の間に「3台」を挿入することができる。それは「テレビ」と「ある」がそれぞれ独立した要素だからである。それでは、「名詞ある」について見てみる<sup>2)</sup>。

(6) 先日魅力ある人物に出会った。 →\*魅力先日ある人物に出会った。

(7) 家族に誠意ある態度をとる。 →\*誠意家族にある態度をとる。

(8) 家に妻子ある人 →\*妻子家にある人

以上のように語の挿入を許さない。「名詞」と「ある」の間に「が」「の」がないこともあり、一層結合が強い。「名詞ある」は一語とみなすことができる。

## 2.3. 形容詞との類似性

### 2.3.1. 程度副詞の修飾

村木 (2012) で『『伝統ある』『魅力ある』という形式は(中略)規定用法専用の形容詞と見てよい可能性があります』と述べている。そこで、形容詞が持つ特徴の一つである「非常に」「もっと」などの程度副詞による修飾の可能性について見てみたい。以下は、程度副詞を加えた文である。

(9) {もっと／非常に} 魅力ある政策を打ち出さなければいけない。

(10) {もっと／非常に} 勇気ある行動が求められている。

いずれも程度副詞の修飾を受けることができる。

一方、「たくさん」などの量を表す副詞は「\*たくさん赤い実」で形容詞を修飾せず、「たくさん食べる人」のように動詞を修飾する。「名詞ある」が量を表す副詞の修飾を受けるなら、「ある」が動詞の性質を示すと考えられるが、どうだろうか。以下は、量の副詞を加えた例である。

(11) \*たくさん魅力ある人物

(12) \*たくさん勇気ある行動

いずれも量の副詞によって修飾されることがない。以上、程度副詞による修飾が可能で、量副詞による修飾が不可能であることから、当該の表現が形容詞の特徴を持ち、動詞の特徴を持たないことがわかる。

### 2.3.2. 別の形容詞との言い換え

彭(2002)で「名詞(φ／が／の)ある」を「形容詞に近い」とし、「～的な」という形容詞と言い換えが可能であることを指摘している。つまり、意味的な点と統語的な点において「名詞ある」が形容詞と類似していることになる。「～的な」は「～」に漢語等を挿入して量産できる形容詞の一つであるが、これ以外にも別の形容詞一語と言い換えが可能なものもある。ただし、元の名詞をそのまま用いる「～的な」(魅力ある＝魅力的な)に比べると、同義語というより類義語というレベルである。

- (13) 勇氣ある行動 → 勇敢な行動
- (14) 活気ある町 → にぎやかな町
- (15) 栄えある優勝 → 名誉な優勝
- (16) 風情ある庭 → 風雅な庭
- (17) 興味ある研究 → おもしろい研究
- (18) 名誉ある地位 → 名誉な地位
- (19) 善意あるメディア → 善良なメディア
- (20) 誠意ある態度 → 誠実で正直な態度

「～的な」との言い換えは、例えば「魅力ある」が「魅力的な」のように元々「魅力」という語彙がそのまま用いられている点で類義性が示されるのは当然としても、以上のような別の形容詞との言い換えが可能であることは、当該の表現が形容詞と類似していることをさらに明確に示すものと考えることができる。

### 2.3.3. 形容詞のテンス

形容詞との意味的な類似性が明らかになったが、さらに、形容詞のテンスとの類似について見ていきたい。テンスについて、形容詞は以下のような用いられ方をすることがある。

- (21) 今年は 暑い／＊暑かった 日が続いた。

主文のテンスは過去であり、主語の示す「日」も過去のものを指し示している。しかし、それを修飾する形容詞は過去形「暑かった」では非文となる。形容詞は名詞にある特徴を付与するため、「どんな日か」という属性付けにおいて、「暑い日」であることを示すためである。つまり、形容詞はテンスとは関わりない名詞の持つ本来の意味特徴を提示する用法を持つ。では、「名詞ある」の例を見てみる。

- (22) 亡くなった伯父は 魅力ある／＊魅力あった 人物だった。

伯父がどのような特徴を持つ人物かについて、主文のテンスに影響されることな

くその本質を示している。「名詞ある」もまた、名詞の本来持つ意味特徴を提示する用法を持つ。一方、過去形が出現する形容詞の例は以下のようなものである。

(23) あんなに {\*暑い／暑かった} 日も終わり、秋風を感じるようになった。これは、時間的推移を表すために主文のテンスより以前を表している。ところが、この点においては「名詞ある」は時間的推移を表す場合に用いられることはない。

(24) あんなに {\*勇氣ある／\*勇氣あった} 青年も年をとり覇気を失った。このように「ある」「あった」どちらも非文となり、「あんなに」が示す過去の状態を表すことができない。この点は形容詞とは異なる。過去を示すためには、「が」「の」を挿入しなければならない。「名詞ある」は形容詞の示すテンス特徴のうち、属性付けの面のみを示すと考えることができる。

以上、2.3.では程度副詞の修飾が可能なこと、形容詞との言い換えが可能なこと、テンスの特徴の3点から、「名詞ある」が形容詞に非常に近似したものであることがわかった。ただし、すべての「名詞ある」がこのような形容詞的な特徴を示すわけではない。例えば「妻子ある身」「十数本ある梅林」のような例も少数ながらあり、これらは形容詞的な特徴を示さない。

## 2.4. 連体詞との相違

単語の中には、活用がなく、名詞の前に置かれその名詞を修飾する役割しか果たさないものが存在する。「あらゆる、ほんの、この、一介の、とんだ…」などがこれにあたり、連体詞と呼ばれてきた。「名詞ある」もまた名詞の前に置かれるが、連体詞と考えるべきか、あるいは先に見たように形容詞と考えるべきか、考察を加える。

まず、連体詞は形容詞のように「―い」「―な」のような形態的な統一性を持たない。また、機能的には名詞を修飾するだけで、形容詞のような述語の用法を持っていない。連体詞の中に形容詞的なものがあるか考えてみると、「小さな」「大きな」は名詞の前に置かれるという統語的特徴と活用を持たないという形態的特徴からは連体詞に入れるべきだが、その意味的特徴においては形容詞である。このように形容詞に似たものも含まれている。一方、「名詞ある」は既に見たとおり、その多くが形容詞に意味的に似ている。しかし、形態的な特徴という点では「赤い」や「親切的」が示すような活用体系を持たない。さらに、次の例のように、統語論的な特徴という点で形容詞が持つ述語用法を基本的に持たない<sup>3)</sup>。

(25) \*太郎は魅力ある。

(26) \*次郎は勇氣ある。

村木（2000, 2002）では、「—い」「—な」以外で形容詞の特徴を持つものを「第三形容詞」「ノ形容詞」と捉えている。「名詞ある」は第三形容詞と考えることができるだろうか。第三形容詞は、名詞を修飾する規定用法と文末の述語に立つ述語用法を持つが、「名詞ある」は規定用法しかない。それゆえに、村木（2012）では「規定用法専用の形容詞」である可能性を指摘している。村木（2012：150）を参考に表1をまとめる。第三形容詞・連体詞は「真紅の」「とんだ」を代表として入れる。表中の「修飾用法」は連用修飾のことを、「活用」は活用の有無を、「程度副詞」は程度副詞による修飾の可否を、「形容詞」は別の形容詞での言い換えの可否を表している。「体系性」は形態的に統一したものが見られるかを示す。

表 1. 形容詞, 連体詞, 第三形容詞と「名詞ある」の比較

	規定用法	述語用法	修飾用法	活用	体系性	程度副詞	形容詞
赤い	赤い花	花が赤い。	赤く	○	—い	○	
親切な	親切な青年	青年が親切だ。	親切に	○	—な	○	
真紅の	真紅のバラ	バラが真紅だ。	真紅に	○	—の	○	○
魅力ある	魅力ある女性	×	×	×	—ある	○	○
妻子ある	妻子ある人	×	×	×	—ある	×	×
とんだ	とんだ災難	×	×	×	×	×	×

以上まとめてみると、「名詞ある」は統語論的には述語用法がない点、形態論的には活用がない点で、形容詞の範疇には入りづらい。また、「魅力ある」の「魅力」は「魅力を探す」「魅力が出てくる」のように格助詞が後接でき、「人々を引き付ける魅力」のように連体修飾を受けることもできるため、紛れもなく名詞である。しかし、意味的な面を見ると、程度副詞による修飾や形容詞一語との言い換えが可能な点は、非常に形容詞に類似している。しかも、体系性という点で「名詞ある」はこの形態で生産性があり、「—い」「—な」のような体系性を持つ形容詞の一類として考えることも可能であろう。

一方、第三形容詞に入っている「真紅の」の「真紅」は格付与できず、名詞ではないと村木（2000, 2002）で指摘される。これらを鑑みると、「名詞ある」はちょうど連体詞と形容詞の中間に位置する語と考えられる<sup>4)</sup>。「形容連体詞」とでも呼ぶべき存在である。形容連体詞を設定するなら、「小さな」「大きな」はこれに入るだろう。

## 2.5. 格助詞がないことの意味

格助詞は、動詞に対する名詞の役割を規定するために、格助詞の付与されない名詞は通常、文においてありえない。ところが、「名詞ある」は当然存在するはずの格助詞が存在しない。この統語論的な特徴によって、一語であるとの主張がより強められている。当然あるべき「が」「の」が無いことは何を意味するのだろうか。また、「名詞 {が／の} ある」の「が」「の」が脱落したものと捉えるべきだろうか。

金水（2011）によると、上代における「の」「が」は「所有」「主格」の機能を持っていたとされる<sup>5)</sup>。さらに、上代～平安時代は「主語を表示する基本的な格はゼロ格であり、連体形句など限定された埋め込み節に限って属格主語表示が認可される」とある。つまり、名詞を修飾する構造では、主語を表示する手段はゼロ格（無助詞）、「が」、「の」のいずれも存在していたということである。

すると、「 $\phi$ ／が／の」の3つは古くから可能だったということになる。ところが、「が」が主文主格助詞として発展していく過程で、ゼロ格（無助詞）は消えていき、「現代共通語で『の』が主語を表示することができるのは、上代・平安時代以来の属格主語表示の化石的な名残である（同：96）」という事態に至ったようである。すなわち、「名詞 { $\phi$ ／が／の} ある名詞」だったものが、「名詞 {が／の} ある名詞」に変化し、さらにこの「が」「の」が省略されることで「名詞ある名詞」が出現したと考えられる。そして、この助詞の省略が「名詞ある」の文文化を進めた可能性がある。そして、「化石」的な名残である「名詞の」がこの3者の中で最もよく使われるという矛盾した事態が現在見られるのである。

したがって、「が」「の」は歴史的にはもともと「あって当然」という存在だったのではなく、古くは「なくて良かった」ものが、あることが求められるようになり、そして省略によって削られたということになろう。あるいは、なくても良かったという古い感覚は「名詞ある」の文体的特徴という形で復活したと考えることもできよう。この点については4.で詳しく述べる。ここでは、このような可能性があることを指摘するにとどめたい。

## 3. 「名詞ある」の名詞の特徴

### 3.1. 抽象的な名詞

「名詞ある」を構成する名詞の特徴について考察する。彭（2002）が「『夫』『妻子』を除いては全部抽象名詞である」と述べているとおり、基本的に抽象的な意味を表す名詞が来ることは本調査でも同様であった。その抽象性が「名詞ある」



を形容詞的にしている要因でもある。実例で見られたものを以下、掲載する。  
( ) は出典である。

興味ある意見, 形ある劇の演技, 統一ある観念 (モーツァルト), 活気ある冒険,  
同情ある言葉, 合理性と能率ある運営 (人民), 教養ある人 (偶像崇拜), 名誉  
ある軍人 (山本五十六), 実行力ある政治家, 一旦事ある場合 (弟子), 魅力あ  
る文章, 特色ある著書 (蘇我), 裕福な商人の自信ある微笑 (裸の王様), 機会  
ある毎, 価値あるもの (青春の蹉跎), 余裕ある私の学生々活 (こころ), フラ  
ンスで最も権威ある写真賞 (2014.11.12 大阪夕刊), 国内の歴史あるリゾート  
ホテル (2014.11.12 地方版／栃木), 均衡ある発展 (2014.11.12 地方版／鹿  
児島)

いずれも具体物ではなく抽象的な意味合いの名詞である。意味するところも「ど  
のような」被修飾語かということを表すものである。

一例, 「光秀のこんにちあるのは信長のその偏執的なまでの道具好みのおかげ  
ではある (国盗り物語)」という例文があった。「こんにち」「現在」などの時を  
表す名詞も見られた。他には「妻子ある男性」のように「妻子」「妻」「夫」など  
の親族を表す名詞もある。

### 3.2. 数値・数量を表す名詞

抽象的な名詞以外では「数値・数量+ある」の表現が多く見られた。以下実例  
である。

幅十メートルはある広い通路, 幅二十メートルは優にある堀 (コンス), 幅  
二百メートル以上もある濁流, 二尺ほどもある大きな蜥蜴 (ビルマの堅琴),  
数基ある墓石 (冬の旅), 俺の部屋の数ある道具 (桜の木), 三里もある大山さ  
ままで (路傍の石), 何百枚もあるモーツァルトのレコード (錦繡), 十数本あ  
る梅林 (あすなろ物語), 高さが 1.9 メートルある大型の壕 (2014.11.13 地方  
版／東京), 市内に 29 ある防音校舎 (2014.11.12 地方版／埼玉)

以上のように, 幅, 高さ, 距離, 数などの語彙と共に用いられる。(27) (28) の  
ように「が」「の」を挿入することが不可能であり, また (29) (30) のように述  
語にも用いられるという特徴がある。

(27) \* 数基 (が／の) ある墓石

(28) \* 1.9 メートル (が／の) ある大型の壕

(29) 梅林が数十本あった。

(30) 通路は幅十メートルあった。



大きさを比喩的に表現した例には、以下のようなものが見られた。これらは「名詞ほどもある」「名詞くらいある」という表現が固定的で、「名詞ある」では用いられないものである。

- (31) 大の男の二の腕ほどもある太さの鉄の棒（コンス）
- (32) 掌ほどもある大きな燐のいろの塊り（ビルマの豎琴）
- (33) \*二の腕ある太さ
- (34) \*掌ある塊り

さて、存在あるいは所有を表す文は連体修飾節として2つの形式をとることができる。文とそれから作られる連体修飾節をまとめると、以下のようになる。

- （場所）に（物）が（数量）ある。→①（物）が（数量）ある（場所）  
→②（場所）に（数量）ある（物）

(35) 家に車が2台ある。→①車が2台ある家，②家に2台ある車  
実例を見てみる。下線のあるものが実例である。

- (36) 村に墓石が数基ある。→①墓石が数基ある村，②村に数基ある墓石
- (37) 市内に防音校舎が29ある。→①防音校舎が29ある市内，②市内に29ある防音校舎
- (38) 裏山に梅林が数十本ある。→①梅林が数十本ある裏山，②裏山に数十本ある梅林

同じ存在を表す文であるが、実例はいずれも②のパターンしか用いられていない。

以上のような「どのくらいあるか（数量）」を示す用法の他に、「どのくらいであるか」を示す用法もある。以下の例は、実例を文に直す形で提示する。

- (39) 三里ある大山さま →ここから大山さままで3里ある。
- (40) 高さが1.9メートルある大型の壕 →大型の壕は高さが1.9メートルある。
- (41) 俺の部屋の数ある道具 →\*俺の部屋に道具が数ある。
- (42) 二尺ある大きな蜥蜴 →? 大きな蜥蜴は二尺ある。
- (43) 幅十メートルある通路 →通路は幅十メートルある。通路は幅が十メートルある。

いずれも「（場所）に（物）が（数量）ある」のパターンではなく、「（場所）まで（数値）ある」「（物）は（（単位）が）（数値）ある」であり、物の存在ではなく、物が「どのくらいであるか」を表すものである。他に、「米は5キロある」「お湯は80度ある」「小説は200ページある」など、いずれも主体がどのくらいであ

るかを示す。さらに、「数ある」は文に戻すことができない。「たくさんある」ことを表し、量副詞のような意味を持っている。

以上、「数値ある」は物の存在が「どのくらいか」を表す通常の用法の他に、「どうであるか」を表す用法があることがわかった。

#### 4. 「名詞がある」「名詞のある」との比較

ここでは、「名詞がある」と「名詞のある」の特徴や「名詞ある」との違いについて考察する。

##### 4.1. 語構成

まず、「名詞ある」は既に見たとおり一語化し形容詞に類似していた。一方、「名詞のある」「名詞がある」は一語相当のものと、二語のものとが見られる。それを語の挿入によって確認する。

(44) 家 {が／の} ある故郷に帰る。 → 家 {が／の} 2軒ある故郷

(45) 子どもに人気 {が／の} ある俳優 → ?? 人気が子どもにある俳優  
→ \*人気の子どもにある俳優

(44) は具体物の存在を示し、「家」と「ある」がそれぞれ独立した要素であるため「2軒」という語の挿入も可能である。一方、(45) は見かけ上は二語であっても強い連語性を持っており、「子どもに」という語の挿入は不自然か不可能である。しかし、彭（2002）でも指摘するように、「名詞 {が／の} ある」は「名詞ある」の持たないテンスの分化を持つ。

(46) 子どもに人気 {が／の} あった俳優

そして、「名詞ある」の持たない述語用法を「名詞がある」は持つ。

(47) その俳優は子どもに人気がある。

その意味では、「名詞がある」の方を第三形容詞に入れるべきだと言えよう。

##### 4.2. 「名詞がある」について

ここでは「名詞がある」の構造について考えてみたい。「勇気がある男」の「勇気」は構造的には主語である。しかし、その主語としての性質は他の文と同じなのだろうか。以下、分析のために文を用いる。

(48) 花子がおにぎりを食べる。

(49) 太郎がその案に賛成する。

(50) 部屋にパソコンがある。

(51) その男に勇氣がある。

「花子」は「食べる」という動作の主体であり、述語に対する主語であることは明確である。次に、動作ではなく意思表示としての「賛成する」もその主体は「太郎」であり、同時に主語である。そして、存在を表す文も「部屋」という場所に「パソコン」という具体物が存在することを表し、「パソコン」が存在の主体で主語である。しかし、(51)は「その男」の中に「勇氣」という性質が存在することを表すが、その存在の主体は抽象的な概念であり、存在の主体で主語であるとするには異質さを感じる。なぜなら、主語は通常「～がどうした」「～がどんなだ」の「～」であり、動作や状態の主体であるために、第一には人や動物などの有情物、第二には具体的な物である無情物が主語になりやすい。ところが、「その男」と「勇氣」ではどちらが主語たるにふさわしいかとなれば、「その男」の方が主語として認識されやすいのである。また先に見たとおり、「勇氣がある」という「名詞＋動詞」は連語であり、その結合度が強い。さらに、拙稿(2004)のとおり、程度副詞の修飾を許す点や形容詞との置き換えが可能であることを考え合わせると、もはやこれは「主語＋述語」ではなく、全体で形容詞的な述語である。

また、(51)を主題化すると「その男(に)は勇氣がある」となり、「その男について言えば、勇氣がある」となる。形式的には「補語(～に)＋主語(～が)＋述語(ある)」である。ところが、このような「名詞がある」の「名詞が」は見かけ上の主語でしかない。そのため、この文は「その男」を主題に取り上げ、それについてどうかということを示す文であり、つまり、「主題(～は)＋内容(～がある)」という構造の文であると考えられるのである。これは文末名詞文や体言締め文と呼ばれる構文とも似ている。さらに、「勇氣がある」が「勇敢だ」という形容詞に置き換えられることを考えると、「その男は勇敢だ(勇氣がある)」で「主語＋述語」とすら見える。

「名詞ある」と比較すると、「名詞がある」は「名詞ある」が不可能な3点(名詞修飾節を作る、述語に立つ、テンスの分化)がある。

#### 4.3. 「名詞のある」について

「名詞のある」は述語に立つことがない点は「名詞ある」と同じである。また、その結合の強さ、形容詞との類似性も見られる。程度副詞による修飾も以下のようである。

(52) もっと品格のある態度

(53) かなり位のある聖職者

異なる点は、名詞修飾節を受けること、さまざまな格助詞と共起可能な点である<sup>6)</sup>。

- (54) 名刺を取次いだ記憶のある妻（こころ）
- (55) 先生と深い縁故のある土地（こころ）
- (56) もしおめえに恨みのある者でもいればべつだが（さぶ）
- (57) これは統計学の分野にも関連のあることだが……（人民）
- (58) 三原製薬とつながりのある学者（人民）

ニ格・ト格は形容詞の必要とする格の一つであり、ニ格をとる形容詞には「詳しい、ふさわしい、適切な、厳しい、親切的な」などがあり、ト格をとる形容詞には「親しい、無関係な」などがある。どちらも取る形容詞には「等しい、平行な、同じ」などがある。また比較を表す場合「塀より高さのある木」「ゲームより人気のある遊び」など、ヨリ格が使われる。「ある」の必須成分は、存在の意味ではガ格とニ格、出来事の意味ではガ格とデ格である。しかし、以上のようにト格、カラ格、ヨリ格が格として求められる点で単なる存在文を超えていることが確認できる。また、これらは「名詞がある」も同様である。

以下、3者を比較した結果を表にまとめる。

表 2. 「名詞がある」「名詞のある」と「名詞ある」の比較

	規定用法	連体修飾節	述語用法	テンスの分化	形容詞性	物の存在
名詞ある	○	×	×	×	○	×
名詞がある	○	○	○	○	○	○
名詞のある	○	○	×	○	○	○

4.4. 「名詞がある」が「名詞のある」より少ないことについて

彭（2002）は「名詞がある名詞」が「名詞のある名詞」よりも極めて少ないことを指摘している。その付録に掲載された実例も「 $\phi$ 、の、が」の中で「が」が最も少ないという結果であった<sup>7)</sup>。

連体修飾節では主格を示す助詞はガ・ノ交替が可能であるが、「が」に比べて「の」にはいくつかの制約があるとされる（高橋 2005：98）。つまり、使用範囲は「が>の」である。また、2.5. で見たように日本語史から見ると、連体修飾節の「の」の使用は「化石的な名残」であるという。果たして現在「の」による主語表示に制約があるのは、この化石的な名残が「が」に押され消えつつあることの現れであろうか。「全般的に言ってガノ交替は衰退しつつある。つまり主格『が』が一般化し、属格主語表示の『の』が駆逐されつつあるということである

(金水 2011: 110)」とある。つまり、全体的・一般的傾向性は「が>の」であるのに対し、「名詞 {が／の} ある名詞」においては逆の現象が起こっていることになる。

使用数という事実にも再度着目すると、本調査(小説)で「が12例<の119例」であった。連体修飾節全体からすれば駆逐されつつある「の」が、むしろ好んで使われているということになる。歴史的変化の方向性を考えると「化石」がむしろ存在感を強めていることになる。なぜなのだろうか。

「名詞がある」は既に見たとおり、例えば「勇氣がある」の「勇氣」は主語の性質が他よりも弱く、全体で述語と見てもいいほどである。「が」の使用の少なさの一つの理由は、このような弱い主語性によるものではないかと考える。弱い主語性しか持たないものに明確な格表示である「が」は必要ない。むしろ、その性質を弱めている「の」がふさわしい。少なくとも「名詞 {が／の} ある名詞」においては、このような主語性を明示しない「の」の選択が行われているのではないかと考えられるのである。だからこそ、ゼロ格が許容されるようになったとも言えよう。

なお、主文末で用いられる「～は名詞がある。」の「が」も形骸化しているとは言え、「が」をはずすことまでは行われていない。それは、構文的に「～に～がある」が形式上求められるからである。一方で、「が」をはずした「彼はやっぱり人気あるね」「これは関係あるな」のような表現は、話し言葉には見られるようだ。

#### 4.5. 文体の違い

「名詞ある」には他の2者にはない文体的な特徴があると考えられる。そのことを新聞と標語という文体から考える。以下は新聞の見出しとその本文である。

- (59) 「可変性」ある物件人気(見出し) 間取りの変更や増改築が手軽にできる「可変性」のある住宅を選ぶ人が増えている。(本文) 2014.10.25  
東京朝刊

見出しは、「可変性のある物件が人気だ」のように「の」「が」「だ」が省略されている。本文に入ると「可変性のある物件」となり、「の」が保持されている。このように見出しには「名詞ある」は多く出現するが、そのほとんどが「名詞 {が／の} ある」の「が」「の」が省略されたもので、「魅力ある」のように「 $\phi$ ／が／の」全てを許容する表現とは異なる。このような無理に削除したのを見出しには多い。

- (60) 命のヘルメット山小屋に計 1000 個配備 火山ある自治体に広がる（見出し）今回の噴火を教訓に、火山のある県内外の自治体にヘルメットを用意する動きが出ている。（本文）2014.10.09 東京夕刊
- (61) 伏見工が企画設計案プレゼン 生徒ら「潤いある空間に」（見出し）生徒らは「音楽学校らしい潤いのある空間に」と意気込んでいる。（本文）2014.10.10 地方版／京都
- (62) 産経記者在宅起訴 前支局長「問題ある対応だ」（見出し）「刑事処分をもって応じるのは極めて問題のある政権の対応だ」と話した。（本文）2014.10.09 東京夕刊
- (63) 新・改装 「高級感ある売り場に」（見出し）「高級感のある売り場で、買い物を楽しんでもらいたい」と話している。（本文）2014.10.25 地方版／大分

彭（2002）はこの理由を「スペースの節約を狙っての使い分けであろう」とするが、この他にも理由があると思われる。まず、「名詞ある」は記事の見出しだけでなく、標語やスローガンに適した雰囲気を持つ表現であるという点である。以下は、標語の入賞作品一覧（1960 年～2013 年）から検出したもので、「名詞ある」が 2 例、「名詞のある」が 1 例、「名詞がある」が 0 例だった。また、1961 年～2014 年までのテーマ一覧からは、「名詞ある」は 3 例、その他は 0 例だった。

- (64) お客様の笑顔まで繋いでいこう価値ある品質（2013 年標語入選作<sup>8）</sup>）
- (65) 改善の心が生みだす質ある職場 夢ある職場（2008 年標語入選作）
- (66) 改善の心が生み出す“夢”ある職場（2005 年品質月間テーマ）
- (67) 価値ある品質で新たな成長を！（2013 年品質月間テーマ）
- (68) 価値ある品質 技と想いをつないで（2014 年品質月間テーマ）
- (69) 限りのある資源を活かす品質管理（1979 年標語入選作）

標語やスローガンは「5・7・5」のリズムを取りやすい傾向が強いが、実例は「名詞ある」で 5 字になるものもあるが、例えば「ゆとりある」も「ゆとりのある日」にすれば 7 字である。いくらでも語を生み出すことができることを考えれば、「の」の脱落が 5 字に縛られた結果とは言えないだろう。やはり「名詞ある」という表現自体が見出しやスローガン、標語に用いられやすい文体的特徴を持つと考えられるのである。以下も標語やスローガンである。交通安全年間スローガンでは「名詞ある」「名詞のある」が 1 例ずつ、市民健康づくり標語と安全衛生標語はそれぞれ「名詞ある」が 1 例のみだった。

- (70) 節度ある生活習慣 身を守る（平成 21 年度秋田市「市民健康づくり標

語」入選)

(71) ゆとりある作業手順で職場の安全 (安全衛生標語入賞作品昭和 62 年)

(72) ゆとりある朝の五分が事故ふせぐ (平成 9 年交通安全年間スローガン)

(73) 出発を早めてゆとりのある運転 (昭和 54 年交通安全年間スローガン)

もしスペースの節約が唯一の理由であるならば、述語に来る「名詞がある」の「が」が省略された見出しがあってもいいわけだが、実際には見られなかった。さらに古めかしい言い方との印象は、歴史的に主格をゼロ格で示した感覚から来るものであろう。

#### 4.6. 共起可能性

1つの名詞が「名詞ある」「名詞がある」「名詞のある」の3つの用法のうち、どこまで用いることができるのか、その共起可能性の範囲について考察する。ただし、ここでは連体修飾節のある名詞を除き、単独で用いられる場合の名詞に限ることとする。なぜなら、例えば「人を助けたいという心 { \*  $\phi$  / が / の } ある人に来てほしい」のように、「名詞ある」は構造的に連体修飾節を受けることが不可能であるという特徴を持っている。ところが単独の場合は「心 {  $\phi$  / \* が / \* の } ある人が助けてくれた。」のように、「名詞ある」しか許されない。そのため、ここでは単独で用いられる場合に限定して、3つの用法の可能性について考察する。その3つとは、すべて可能なもの、2つ可能なもの、そして1つだけ可能なものである。「名詞ある」が単に「が」「の」を省略したものであるならば、すべて可能なはずであるが、実際はそうではない。以下、例を提示しながらどのようなパターンがあるのか見ていく。

##### 4.6.1. すべて可能な名詞

ここには「名詞ある」「名詞がある」「名詞のある」の全てに共起可能な名詞を列挙する。

趣, 勇気, 名誉, 価値, 興味, 魅力, 才能, 迫力, 見ごたえ, 風情, 分別, 誇り, 理解, 余裕, 恩, 格式, 権威, 気品, 気骨, 教養, 経験, 見識, 光沢, 個性, 実績, 常識, 思慮, 信頼, 誠意, 責任, 節度, 説得力, 実行力, 善意, 先見性, 弾力, 知恵, 力, 秩序, 伝統, 特徴, 良識, 命, 未来, 落ち着き, 分別, ゆとり, 歴史, 機会, 活気, 特色, 実効性, 限り, 形

以上は、すべて抽象的な名詞である。この他、家族を表す「妻子, 夫」があるが、ゼロ格が最もよく使われ、「が」は「妻子がある身」という例しか見られな



かった。また、「現在、こんにち」は「現在あるのは」あるいは「～のおかげでこんにちある～」の形でしか用いられない（＊現在ある友人）。

#### 4.6.2. 「名詞がある」「名詞のある」が可能な名詞

例えば「味 {＊ $\phi$ ／が／の} ある筆字」のように、ゼロ格だけが不自然な表現になるものである。「絵 {が／の} ある部屋」のような例が入るため、名詞は具体物を表すものはすべて可能である。以下は、抽象的な名詞だけを取り上げた。

味, 好奇心, 可能性, 必要, 貫禄, 意欲, 能力, 機知, 緊張感, 義理, 権力, 好意, 効果, 功績, 根性, 罪, 調和, 度胸, 徳, 人気, リーダーシップ, 歯ごたえ, 含み, ボリューム, かさ, 問題, 厚み, 異常, 腕, 潤い, 思いやり, 関係, 記憶, 癖, 元気, 交際, 自信, 親しみ, 渋み, 自由, 障害, すごみ, 背, 体力, 蓄え, 知名度, 使いで, つや, 強み, 弱み, 手ごたえ, 素質, まとまり, ばらつき, 不安, 矛盾, 高さ, 深さ, 重さ, 弾力性, 思想性, 実現性, 意外性, 柔軟性, 可能性, 社会性, 安定感, 透明感, 安心感, 親近感, 存在感, 演技力, 資金力, 拘束力, 決定力, 実力, 忍耐力, 説得力, 判断力, 競争力

#### 4.6.3. 「名詞ある」「名詞のある」が可能な名詞

例えば「実り { $\phi$ ／？が／の} ある研修」のように「が」が、まったく不可ではないが、不自然に感じられるものである。数は少ないが存在する。この分類に入るものは判断に揺れが見られるものもあるだろう。

含蓄, 実り, 意義, 由緒, 善意, 確信, 同情, メリハリ, けじめ

#### 4.6.4. 「名詞ある」のみ可能な名詞

例えば「栄え { $\phi$ ／＊が／＊の} ある勝利」のように「名詞ある」で固定的に用いられる表現である。数は少ない。

一理, 諸説, 数, 大恩, 心, 生, 事, 誉れ, 栄え, 数メートル（数値・数量）

#### 4.6.7. 「名詞のある」のみ可能な名詞

例えば「名 {＊ $\phi$ ／＊が／の} ある人物」のような例で、「名詞のある」で固定的に用いられるようである。数は少ない。

ゆかり, 働き甲斐, 名, 花, 雰囲気, 骨

以上から、「名詞のある名詞」が最も使われる形式であり、「名詞がある名詞」だけで使われるものはないことがわかった。特筆すべきは、「名詞ある名詞」が

分量的にも用法的にも存在感のある表現であることである。

## 5. おわりに

以上、「名詞ある」を中心にその文法的特徴を探り、連体詞・形容詞と比較した。さらに、「名詞がある」「名詞のある」との違いについて考察し、最後に「ある」の前接する名詞の種類と「 $\phi$ ／が／の」のパターンを確認した。

その結果、「名詞ある」は一語として働き、形容詞に類似していること、さらに「名詞のある」「名詞がある」よりもその性質が強いこと、文体的には見出しに適したものであることがわかった。また、「名詞ある」の「名詞」に由来する要素も様々な広がりとかかなりの分量を持つことがわかった。

今回は、歴史的な変化については先行研究を引用するにとどまった。また、なぜ3用法と2用法、1用法の差が生じるのかについては述べることができなかった。これらの点を今後の課題としたい。

## 注

- 1) 彭 (2002) では「『N アル』が完全に用言らしさを失っている」と述べ、テンスの対立、副詞の修飾がないことをその理由にあげている。
- 2) 当該の表現には下線を付す。
- 3) 実例に見られないわけではないが、いずれも不自然な例ばかりであり「が」が脱落した話し言葉的な感じがある。自然な例は、彭 (2002) にもあるように「～には一理ある。」「～には諸説ある。」しかないようである。
- 4) 村木 (2012) の第三形容詞の中には、述語用法を持たないものも入っている。例えば、過小の資本→\*資本が過小だ。耐火の建築物→\*建築物が耐火だ。燃えさしだろうそく→\*ろうそくが燃えさしだ。このようなものも第三形容詞に入れるならば「名詞ある」も第三形容詞に入れられていい。さらに連体詞も第三形容詞に入ることになるだろう。
- 5) 野村剛史(1993)「上代のノとガについて(下)」『国語国文』62-3、「古代から中世の「の」と「が」」『日本語学』12-11などを参考にして述べた箇所である。本論では通時的に検証することは不可能であるため、先行研究の論及を引用するのみとした。
- 6) 彭 (2002) では「N のある」が二格、ト格、カラ格の名詞を支配する場合があると実例を載せている。
- 7) この結果も「の」の削除という新聞の見出し特徴が「名詞ある」の用例数を多くした可能性もある。したがって、かなり不自然な実例もある点を指摘しておきたい。
- 8) 品質月間委員会による標語の入賞作品の一覧(1960年～2013年)から検出した標語。

## 参考文献

- 安達太郎・阿部忍・塩入すみ・白川博之・高橋美奈子・野田春美・前田直子（2008）『現代日本語文法 6 第 11 部複文』日本語記述文法研究会 くろしお出版
- 庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 大塚望（2004）『「～がある」文の多機能性』『言語研究』125 日本言語学会
- 金水敏（2011）「第 3 章統語論」『シリーズ日本語史 3 文法史』岩波書店
- 高橋美奈子（2005）「連体修飾節主語を表すガとノ」『新版日本語教育事典』日本語教育学会編 大修館書店
- 彭広陸（2002）『「Nアル」をめぐる——「Nノアル」「Nガアル」との比較を兼ねて——』『日本語学研究Ⅱ』北京日本学研究中心編
- 村木新次郎（2000）『「がらあき——」「ひとかど——」は名詞か、形容詞か』『国語学研究』39, 東北大学文学研究科
- （2002）「第三形容詞とその形態論」『国語論究 10 現代日本語の文法研究』明示書院
- （2012）『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房

## 用例出典

『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』新潮文庫（小林秀雄「モオツァルト」,（人民）星新一「人民は弱し官吏は強し」, 小林秀雄「偶像崇拜」（蘇我）「蘇我馬子の墓」, 阿川弘之「山本五十六」, 中島敦「弟子」, 開高健「裸の王様」, 石川達三「青春の蹉跎」, 夏目漱石「こころ」, 司馬遼太郎「国盗り物語」,（コンス）塩野七生「コンスタンティノープルの陥落」, 竹山道雄「ビルマの豎琴」, 立原正秋「冬の旅」, 梶井基次郎「桜の木」, 山本有三「路傍の石」, 宮本輝「錦繡」, 井上靖「あすなろ物語」）

毎日新聞データベース（毎日 News パック）

おおつか・のぞみ（創価大学文学部准教授）